

Poss-ingにおける動詞句削除

中川 聡

1. 序論

英語では同じ動詞句の繰り返しを避けるために2つ目の動詞句が空になる現象がある。この現象は動詞句削除と呼ばれ, (1)に示されるようなものである。

(1) He has seen it and I have too. (Swan (2005: 162))

これまで先行研究では定形節で観察される動詞句削除について論じられてきたが, Anderson (2007) や Cara (2009) はこの現象が (2) のような非定形節でも起こることを観察している。

(2) a. Your driving to work was much quicker than his ~~driving to work~~ since he had to stop for gas. (Anderson (2007: 1))

b. Erik's buying a car came as a surprise, and Bud's ~~buying a car~~ came out of nowhere. (Cara (2009: 2))

(2) では動詞句削除が属格主語を伴う動詞的動名詞 (以降, Poss-ing) 内で起こっていることが示されている。Cara (2009) ではPoss-ingでの動詞句削除には説明されるべき言語事実があることが指摘されているが, それらを解決する説得力のある統語的な説明は与えられていない。さらにこの事例は先行研究でもほとんど注意が払われていない。したがって本論文では (2) に観察されるPoss-ing内での動詞句削除がどのようなメカニズムで行われているか分析し, Cara (2009) で取り組むべき問題として挙げられている言語事実を説明することを目的とする。

本論文の構成は以下の通りである。2節ではCara (2009) で挙げられている

Poss-ingに観察される問題点を概観する。3節では動詞句削除に関する先行研究の分析を概観し、それらの分析ではPoss-ing内で観察される動詞句削除の事例を説明できないことを示す。4節ではLasnik (1999) で提案されている動詞形態素の観点からの動詞句削除分析を採用し、Poss-ingの統語構造を明らかにすることで、2節で論じる動詞句削除の問題に説明を与えていく。5節で本論文の結論をまとめていく。

2. Poss-ingに見られる動詞句削除についての問題点

この節ではCara (2009) で挙げられているPoss-ing内での動詞句削除についての問題を概観していく。

最初の問題点は(3)に示されるように、Poss-ing内で動詞句削除が認可されるためには先行詞もPoss-ing内にある動詞句でなければならないということである。

- (3) a. *I thought John would leave early, and I knew about Mary's ~~leaving~~ early.
 b. I thought John would leave early, and I knew about Mary's leaving early.

(Cara (2009: 3))

削除される要素とその先行詞の間には以下の2つの制約が課せられるとこれまでに考えられている。1つは、Ross (1967) で観察されている削除を受ける要素の先行詞は削除を受ける要素にC統御されないという制約である。もう1つは、削除を受ける要素は、もしその先行詞が異なる等位項にあれば、その先行詞に先行できないという制約である。しかし、(3)はそのどちらの制約によっても説明されない。¹

さらに以下の例のように削除を受ける要素が先行詞を見つけることができるかと予期されるが容認度が下がる事例もある。

- (4) ² Sven's playing the guitar convinced me that John should ~~play~~ the guitar.

(ibid.: 4)

この事例は削除を受ける要素の先行詞がPoss-ing内にある動詞句の場合、容認度の判断が話者によって異なることを示しているものとも言える。

したがって、Cara (2009) で論じられている Poss-ing 内の動詞句削除に関する問題は以下のようにまとめられる。

(5) a. なぜ (3a) のような事例は容認されないのか。

b. なぜ (4) のような事例は話者によっては容認可能と判断されるのか。

以下ではこの2つの問題に統語的説明を与えることを目的とし、議論を進めていく。まず、次節では近年の動詞句削除に関する先行研究の分析を概観し、その分析では上記の2つの問題を説明することができないことを示していく。

3. 先行研究の分析

3.1. 素性に基づく分析

近年、削除現象を素性の観点から分析する先行研究を多く見ることができている。それらの先行研究は削除を引き起こす素性を仮定し、その素性を持つ主要部の補部が音韻部門で削除されると分析することで、削除現象に説明を与えている。ここではその中で Emoto (2007) の分析を概観し、その分析では Poss-ing 内で観察される動詞句削除の事例は説明されないことを示す。

Emoto (2007) は近年のミニマリストプログラムで提案されたフェイズ主要部からの素性継承のメカニズムに基づいて削除現象を説明している。Emoto (2007) はフェイズ主要部は (6) に示されるような沈黙素性 (silence feature) を持ち、その素性が削除を引き起こすと主張している。

(6) *The Silence Feature*

The silence feature is borne by the phase C and D; the feature triggers Ellipsis of the complement of the head which bears it. (Emoto (2007: 327))

(6) によれば削除現象はフェイズ主要部 (C や D) の持つ沈黙素性とその補部の削除を引き起こすことになる。²

(6) に基づいて Emoto (2007) は以下のように Sluicing, NumP 削除, vP 削除, nP 削除を分析している。³

(7) $[_{CP} C [_{+Silence}] [_{TP} \emptyset]]$ (Sluicing)

(8) [_{CP} C [+Silence] [_{TP} T [_{vP} Ø]] (vP-ellipsis)

Inheritance

(ibid.: 321)

(9) [_{DP} D [+Silence] [_{NumP} Ø]] (NumP-ellipsis)

(10) [_{DP} D [+Silence] [_{NumP} Num [_{nP} Ø]]] (nP-ellipsis)

Inheritance

(ibid.: 328)

Emoto (2007) は沈黙素性がCやDのようなフェイズ主要部に留まる場合とTやNumのような下位の機能主要部へと継承される場合があると提案し、沈黙素性がフェイズ主要部に留まる場合にはsluicingやNumP削除が起こり、TやNumに継承されると、vP削除やnP削除が起こると主張している。

ここで、Emoto (2007) の分析がPoss-ing内の動詞句削除を説明できるかどうか検証してみる。Poss-ingは属格主語を伴うのでその構造はDPであると考えられる。⁴ さらに、(2) に示されるようにPoss-ing内の削除は属格を付与されたDPの補部が対象となっている。したがって、Poss-ing内の削除は(9)のNumP削除に相当する事例とみなすことができる。Emoto (2007) では、NumP削除はフェイズ主要部にある沈黙素性がNumPに継承されずにDに留まる場合に起こると分析されているので、Emoto (2007) の分析に基づく、Poss-ing内の動詞句削除はDに沈黙素性が留まった結果引き起こされる現象ということになる。このように考えるとDの補部は常に削除を受けることになり、Poss-ing内の動詞句削除は常に容認可能な事例として起こる現象ということになる。しかし、実際には(3a)や(4)のようにPoss-ing内の動詞句削除の事例であっても容認されない事例や、話者によって容認可能性の判断が揺れる事例があり、Emoto (2007) の分析ではこのような事例も誤って容認可能と予測してしまうことになる。したがって、Emoto (2007) の素性に基づく削除の分析はPoss-ing内の動詞句削除の事例を説明できないということになる。

Emoto (2007) と同様に削除現象が素性によって引き起こされると分析するいくつかの他の先行研究はあるが (Merchant (2001), Gengel (2005)),⁵ それらの分析もEmoto (2007) と同様に(3a)や(4)のような事例の文法性を正

しく説明できないという問題に直面する。したがって素性に基づく動詞句削除の分析ではPoss-ing内で生じる動詞句削除の問題を解決できないということになる。

3.2. 格形態に基づく分析

Cara (2009) は容認されないPoss-ing内での動詞句削除について、(11)に示される制約に基づく説明を試みている。

(11) *Morphological Anchoring*

A DP is morphologically anchored iff it is morphologically non-distinct in case-marking from its correlate in the ellipsis antecedent. (Cara (2009: 7))

この制約は、あるDPが形態的に支えられる (morphologically anchored) のは、そのDPが格標示の点で削除現象の先行詞 (ellipsis antecedent) に含まれる相関要素 (correlate) と形態的に異なっていないときに限る、ということになる。Poss-ingに関わる削除現象においては、この制約は、VPが削除され属格を付与されているDPが残される場合、先行詞の相関要素も属格を付与されているDPを伴っていなければならないことを意味する。

この制約に基づけばPoss-ingにおける動詞句削除の事例のうち (3a) ((12)として再掲する) は説明できることになる。

(12) *I thought John would leave early, and I knew about Mary's leaving early.

(ibid.: 4)

(12) ではMary'sは削除を受ける動詞句 *leaving early*との相関要素であるが、属格を付与されている。一方、削除を受ける要素の先行詞である動詞句 *leave early*との相関要素であるJohnは主格を付与されている。このように(12)ではJohnとMary'sは格形態を異にしているため、動詞句削除がなされるとMary'sが形態的に支えられないことになる。このことは(11)の制約に違反し、(12)での動詞句削除は容認されないことになる。したがって、一見するとこの制約はPoss-ing内の削除に作用しているように思えるかもしれない。しかし、Cara (2009) 自身も認めているようにこのような制約は単なる後付けされた規定であり、事実を記述したに過ぎない。さらに、この制約でもPoss-ing内で起こる

すべての動詞句削除の事例を説明できるわけではない。この制約が正しければ、(4) ((13) として再掲) のような2つの主語 *Sven* と *John* がそれぞれ異なる格を付与されている例も非文法的と予測される。

- (13) ² *Sven's playing the guitar convinced me that John should ~~play the guitar~~.*
(ibid.)

しかし、2節でも述べたように (13) の文法性の判断には揺れがある、言い換えれば、この事例を容認する話者もいることを考慮すれば、この制約に基づいて Poss-ing 内での動詞句削除を説明することはできない。したがって Cara (2009) で提示されている形態格に基づく分析も Poss-ing 内での動詞句削除の問題を解決できないことになる。

以上、この節では先行研究における動詞句削除の分析のうち、素性に基づく分析と、格形態に基づく分析を概観してきた。どちらの分析も Poss-ing で観察される動詞句削除の問題を解決することができないということを示した。次の節では動詞形態素の観点から動詞句削除を分析している Lasnik (1999) に基づいて、Poss-ing 内での動詞句削除の事例を説明していく。

4. 提案

この節では (5) にまとめた Poss-ing 内での動詞句削除の問題を説明するために、動詞形態素に基づいて動詞句削除を分析している先行研究に着目する。そのような先行研究に Lasnik (1999), Kim (2005), Nunes and Zocca (2005), Omaki (2007, 2009) などが挙げられる。この節ではそれらのうち、Lasnik (1999) の動詞形態素に基づく分析を概観し、その後 Poss-ing 内の動詞句削除に説明を与えていくことを試みる。

4.1. 動詞形態素に基づく分析

動詞と動詞形態素の関係は Chomsky (1957) 以来、GB理論やミニマリストプログラムの中で取り扱われてきた論題の1つである。Chomsky (1957) では動詞と動詞形態素は別個の位置に生成されると提案されており、GB理論でも

この提案は支持されていた。しかし、ミニマリストプログラムではChomsky (1993) で新たな枠組みが提案されている。その枠組みでは、動詞は屈折した状態で派生に入り、Inflにある素性と照合関係に入ると考えられている。このような動詞形態素の議論に対し、Lasnik (1999) はChomsky (1993) での提案は英語におけるdo支持を説明できないという点で問題であるとし、これに修正を加えた分析を提示している。その提案は (14) に示されるものである。

- (14) a. Infl_{affixal} V_{bare}
 b. *Infl_{featural} V_{bare}
 c. *Infl_{affixal} V_{inflected}
 d. Infl_{featural} V_{inflected}

(14) に示されるようにInflは接辞か素性の集合のどちらにもなり、Inflが接辞の場合には音韻部門で動詞と併合し、Inflが素性の集合の場合には対応する動詞の素性と照合関係に入らなければならないということである。前者は (14a) の場合を指し、後者は (14d) の場合を指す。さらにLasnik (1999) では、(14a) は語彙動詞を伴う場合であり、(14d) は助動詞 (be動詞や完了のhave) を伴う場合であると主張されているが、このことをより明示的に述べると、語彙動詞は屈折しない形態で派生に入り、Inflにある接辞はPFで隣接性の下で動詞に付加するのに対して、助動詞は完全に屈折した形態で派生に入り、それらの持つ形式素性はInflの持つ素性と照合されるということになる。いわばこのLasnik (1999) の分析はChomsky (1957) とChomsky (1993) の2つを併せ持ったものと言える。

この分析に基づいて、Lasnik (1999) は英語に観察されるdo支持について以下のような説明を与えている。まず、(15) に示されるように英語では語彙動詞を伴う否定文ではdoが現れる。

- (15) a. John did not leave.
 b. *John not left. (Omaki (2007: 92))

語彙動詞を伴う否定文の統語構造は (16) に示されるように動詞は屈性しない形態で派生に入り、Tにある時制接辞はPFで隣接性の下で動詞に付加すると分析される。⁶

(16) [TP John [T' T_{affixial} [NegP not [VP leave]]]] (ibid.)

しかし、否定文の場合には not が T と語彙動詞の間に介在しているので、両者は音韻的に隣接しない状態になってしまう。そのため、(15b) のように時制接辞が動詞に付加することはできず、do が T に挿入され (15a) が派生されることになる。

これに対し、(17) に示されるように助動詞を伴う否定文では do は現れない。

(17) a. John is not smart.

b. *John not is smart.

c. John has not been smart.

d. *John not has been smart. (ibid.: 91)

助動詞を伴う否定文 (17a) の統語構造は (18) に示される。

(18) [TP John [T' is_i [NegP not [VP t_i smart]]]] (ibid.)

助動詞の場合は完全に屈折した形態で派生に入り、T は接辞ではなく素性の集合として分析されることになる。したがって、T の素性を照合するために、助動詞は T へ移動し、結果として do を伴わない否定文が派生されることになる。助動詞が T へ移動しない場合は T の素性が照合されないため、(17b) や (17d) のように非文法的となる。

Lasnik (1999) はこの分析を用いて、以下の動詞句削除についての対比にも説明を与えている。

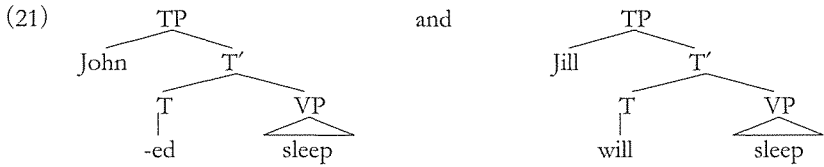
(19) John slept, and Mary will sleep, too. (Lasnik (1999: 108))

(20) a. *John was here, and Mary will be here, too.

b. *John has left, but Mary shouldn't have left, too. (ibid.: 109)

(19) に示されるように、語彙動詞を伴う削除は先行詞との形態的同一性は要求されないが、(20) に示されるように、助動詞 (be 動詞や完了の have) を伴う削除は先行詞との形態的同一性が要求されるということである。この事実も語彙動詞の場合は (14a)、つまり、屈折しない形態で派生に入り、Infl にある接辞は PF で隣接性の下で動詞に付加し、助動詞を伴う場合は (14d)、つまり、完全に屈折した状態で派生に入り、それらの持つ形式素性は Infl の持つ素性と照合されると分析することで説明される。具体的には、(19) では語彙動詞は

屈折しない形態で派生に入るため、以下に示されるように2つのVP間に形態的一致が観察されることになる。



ここでLasnikは(22)に示されるような動詞句削除は音韻部門で形態的同一性の下で許されるという立場をとっている。

(22) Form Identity Condition on VP Ellipsis

The elided VP and its antecedent must be identical in form.

(Omaki (2009: 198))

(22)に基づいて、2つ目の動詞句の削除は容認され、その後第一等位項では-edがPFで動詞sleepと併合し、(19)が派生される。

一方、(20a)では助動詞は完全に屈折した形で派生に入るの、2つの動詞句はそれぞれ *was here* と *be here* になる。前述のようにLasnikは動詞句削除は音韻部門で形態的同一性の下で許されるという立場をとっているの、(20a)では2つの動詞句は形態的に同一ではないため、削除は容認されない。(20b)でも同様に、2つの動詞句はそれぞれ *has left* と *have left* と形態的に同一ではないので、削除は容認されないということになる。

ここまで、Lasnik (1999) の動詞形態素の分析と、その観点からの動詞句削除の分析について概観してきた。Lasnik (1999) の分析はその後の研究で助動詞の分析について問題点が指摘されているが、語彙動詞の分析については受け入れられてきている。また、助動詞についても、先行研究で問題視されているものの、そこで提示されている代案はいずれも若干の修正を施す程度のものであることを考慮すると、Lasnik (1999) の分析そのものはこれまで完全に否定されているわけではないと言える。⁷ したがって、本論文ではLasnik (1999) の分析を採用し、以下でPoss-ing内での動詞句削除の事例に説明を与えていくこととする。

4.2. Poss-ing内に見られる動詞句削除に関する統語的説明

この節ではPoss-ing内での動詞句削除に説明を与えていくが、その前に、Poss-ingの統語構造を分析する必要がある。まずは、その点を先行研究の観察に基づいて議論し、Poss-ingの範疇や内部構造を明らかにしていく。

4.2.1. Poss-ingの範疇と内部構造

Abney (1987) やPires (2001) をはじめとする多くの先行研究において、Poss-ingは外的分布や統語的特性の点で名詞的な特徴を示すことからDPとして分析されている。まず外的分布から観察する。Poss-ingは(23)のように主語や目的語位置に現れることができる。

(23) a. His hunting elephants can be dangerous. (Yamada (1987: 145))

b. We defended Bill's hitting John. (ibid.)

c. Everyone was surprised at the army's being destroyed. (ibid.)

言うまでもなく、これらの位置に名詞句は現れることができる。また、(24)や(25)のようにPoss-ingは名詞句と同様に話題化を受け、強調構文での焦点位置に現れることができる。

(24) a. John's smoking stogies I can't abide.

b. John's weakness for stogies I can't abide. (Abney (1987: 173))

(25) a. It's John's smoking stogies that I can't abide.

b. It's John's weakness for stogies that I can't abide. (ibid.)

以上から、Poss-ingは名詞句と同じ外的分布特性を示すと言える。

次に統語的特性について概観していく。(26)に示されるように名詞句と同様にPoss-ingからはwh句の抜き出しはできない。⁸

(26) a. *Who didn't you like our talking to t? (Battistella (1983: 3))

b. *Who did you see the picture of t? (Diesing (1992: 97))

さらに、(27)もPoss-ingと名詞句の統語的特性の類似性を示す例と言える。

(27) a. Someone talked about every team's appearing on television.

(every > someone)

b. Someone talked about every team.

(every > someone)

(Malouf (2000: 139))

(27a) は数量詞表現 *every team's* が Poss-ing の主語として働いている場合、主節の主語に含まれる数量詞表現 *someone* よりも広い作用域をとれることを示している。このことは (27b) に観察されるように数量化された名詞句 *every team* と同じ特性である。

以上より、Poss-ing は外的分布と統語的特性の点で名詞句と同じ特性を示すと言えるのでその統語範疇は DP と考えることができる。

Poss-ing の内部構造については、目的語が前置詞 *of* を介さずに選択されていることから対格付与に関わる *v* を含むことは明らかである。問題は T を含むかどうかという点であるが、この点を明らかにするために Poss-ing 内での副詞の分布を調べてみる。

(28) a. *Chris's casually putting the roast in the oven appalled the visiting.*

(Malouf (2000: 138))

b. **John's probably being a spy made Bill think it wise to avoid him.*

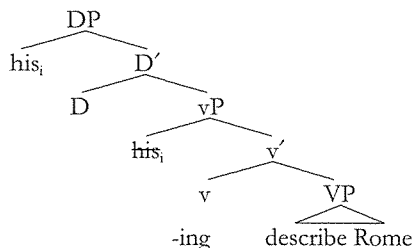
(Abney (1987: 180))

(28a) が示すように Poss-ing 内には VP レベルに付加する *casually* のような様態副詞は現れることができるが、(28b) が示すように TP レベルに付加する *probably* のような文副詞は現れることはできない。したがって、Poss-ing の内部構造には T は含まれないということになる。

ここまでの議論をふまえて本論文では Poss-ing の統語構造を以下のように提案する。

(29) *We remember his describing Rome.*

(Abney (1987: 178))



Molton (2004) に従って、Poss-ing の主語は [Spec, vP] から [Spec, DP] へと移

動し、構格格としての属格を付与されると主張する。また、前節で論じたようにここでは Lasnik (1999) の分析を採用するので、動詞は -ing 接辞とは独立して派生に入ることになる。しかし、これらのこと以上に (29) の構造で重要な点は -ing 接辞が *v* に基底生成されていることである。このことを明らかにするために、動詞的動名詞を形成する -ing 接辞の歴史的発達を観察する。

Ukaji (2000) によれば、動名詞の起源は古英語期に存在した (30) に示されるような抽象名詞である。

- (30) a. *seo feding ðara sceaþa*
 the feeding the (gen.) sheep (gen.)
 ‘the feeding of the sheep’ (Ukaji (2000: 271))
- b. *swiþlic wafung*
 great amazing
 ‘great amazement’ (ibid.: 270)

(30) の抽象名詞はそれぞれ動詞に -ing/-ung 接辞が付加することで形成されている。それらの名詞的な特性は (30a) のように属格形の名詞句を意味上の目的語として伴うことや、(30b) のように形容詞を伴うことから示される。しかし、中英語期になるとこの -ing/-ung 接辞の付加によって形成される抽象名詞は動詞的性格を帯びようになり、動詞的動名詞としての V-ing が発達することになる。⁹ このことは (31) のような例が 15 世紀頃から観察されるようになったことから示される。

- (31) *of my departing our consciences trulye.* (Ohmura (1995: 79))

また、この -ing/-ung 接辞を伴う抽象名詞が中英語期に動詞的性格を帯びようになったことと関連して、前者と後者では -ing 接辞の特性そのものに変化があったことが Koma (1980) で論じられている。Koma (1980) は古英語期には -ing/-ung 接辞は動詞に付加し、それを名詞という範疇に変えることから派生接辞であったが、中英語期の現在分詞との音韻的融合の際に (注9を参照)、-ing 接辞の中には動詞に付加しても範疇を変えない屈折接辞としての性格を持つものが現れるようになったと述べている。Koma (1980) ではさらに、このような屈折接辞は独立した機能主要部を占めると主張されてい

る。¹⁰ ここではこのKoma (1980) の主張に基づいて、Poss-ingにおいても-ing接辞は機能主要部を占めると分析する。前述のようにPoss-ingの内部構造にTは存在しないことを考慮すると、-ing接辞は機能主要部vを占めるかあるいは、-ing接辞が独自の機能主要部として投射する2つの可能性が考えられる。後者の分析は、例えば-ing接辞は前述のように名詞的な特性を持っていることから機能主要部nを占めるといふものである。しかし、このような分析はPoss-ing内の副詞の位置を観察すると支持されないことが示される。

(32) a. John's hurriedly putting out the fire.

b. *John's putting hurriedly out the fire. (Cara (2009: 4))

もし-ing接辞が機能主要部nを占めるとすると、それはvPの外側にあることになる。したがって、動詞putが移動して-ing接辞に併合すると仮定すると、(32a)が非文法的であり、(32b)が文法的であると事実と反して予測してしまうことになる。このことはPoss-ingにはvとDの間に機能範疇がない、言い換えれば、-ing接辞は独立した機能範疇を投射しないことを意味する。よって、ここではPoss-ing内で-ing接辞は機能主要部vを占めると分析し、(33)を提案する。¹¹

(33) Poss-ingにおいて-ing接辞はvに基底生成される。

(33)に基づけば、V-ing形はVにある動詞がvに移動し、-ing接辞と併合した結果派生されることになる。

以下ではLasnik (1999) での動詞句削除の枠組みとこの節で提案したPoss-ingの構造に基づいて、Poss-ing内での動詞句削除について説明を与えていく。

4.3. 分析

はじめに、Poss-ingの動詞句削除が容認される(34)のような事例を説明する。

(34) Erik's buying a car came as a surprise, and Bud's buying a car came out of nowhere. (Cara (2009: 2))

(34)のPFでの表示は以下のようになると考えられる。¹²

(35) [_{DP} Erik's [_{VP} buy_i + ing [_{VP} buy_i a car]]], ..., [_{DP} Bud's [_{VP} buy_i + ing [_{VP} buy_i a car]]] came out...

(35) に示されるように2つ目の動詞句 *buying a car* と形態的に同一な動詞句が存在するので、その動詞句の削除は容認され、(34) が派生されることになる。

次に2節で挙げた説明されるべき Poss-ingにおける動詞句削除の事例を説明する。それらの事例を (36), (37) として以下に再掲する。

(36) a. *I thought John would leave early, and I knew about Mary's ~~leaving early~~.

b. I thought John would leave early, and I knew about Mary's leaving early.

(ibid.: 3)

(37) ² Sven's playing the guitar convinced me that John should ~~play the guitar~~.

(ibid.: 4)

(36) は Poss-ing 内での削除は先行詞が属格を付与された DP の補部にある動詞句でなければ認められないことを示す例である。(36) の派生は以下のように PF で表示されることになる。

(38) ...John T will [_{VP} leave early], and ... Mary's <[_{VP} leave_i + -ing [_{VP} [leave_i early]]]> -ing 接辞は v に基底生成するので第二等位項の動詞句は PF ではすでに動詞 leave が -ing 接辞と併合していることになる。したがって PF で両方の等位項の vP は同一ではなくなるので、(38) では第二等位項の vP の削除は容認されない。このことから (36a) は非文法的となる。

次に (37) の例を説明する。Cara (2009) によれば、この事例に関しては容認する話者と容認しない話者がいるということである。(36) と同様にまずは、この事例の PF での表示を考える。

(39) [_{DP} Seven's [_{VP} play_i + -ing [_{VP} play_i the guitar]]]... John should <[_{VP} play_i [_{VP} play_i the guitar]]>.

(39) で2つ目の vP *play the guitar* の先行詞を考える。文法性の判断に揺れがあることの説明として、ここではこの動詞句の先行詞として vP *playing the guitar* と VP *play the guitar* の両方が選ばれる可能性を考える。前者を選ぶ話者にとっては2つの動詞句は形態的に同一にならないので、動詞句削除は認められず、非文法的となる。一方、後者を選ぶ話者にとっては2つの動詞句は形態的に同一になる。この場合は動詞句削除が認められ、文法的となる。¹³ したがって、(37) の文法性の判断に揺れが生じるという事実が説明されることとなる。

上記のようにPoss-ing内の動詞句削除の事例は、動詞は屈折しない形で派生に入るという動詞形態素の観点からの動詞句削除分析と-ing接辞がvを占めるという主張によって正しく説明できることになる。

また、ここでの議論は動詞句削除を動詞形態素の観点から分析する先行研究, Lasnik (1999), Kim (2005), Nunes and Zocca (2005), Omaki (2007, 2009) に支持を与えるということにもなる。

最後に、本論文で扱っているPoss-ing内の動詞句削除の事例が定形節で観察される動詞句削除現象の事例との関係でどのように位置づけられるのか述べることにする。定形節で観察される動詞句削除は(40)に示されるようなものである。

- (40) a. José Y barra-Jaegger likes rutabagas, and Holly does ~~likes~~ rutabagas too.
 b. José Y barra-Jaegger ate rutabagas, and Holly has ~~eaten~~ rutabagas too.
 c. José Y barra-Jaegger is eating rutabagas, and Holly is ~~eating~~ rutabagas too.
 (Johnson (2001: 439))

(40)の事例はいずれも助動詞を伴っていることから、定形節で観察される動詞句削除は助動詞によって認可されると一般に仮定されている (Johnson (2001), Merchant (2001), Emoto (2007) を参照)。現行のミニマリストの枠組みでは助動詞はTを占めると分析されているので、このことは動詞句削除が認可されるためにはTの存在が必要ということの意味する。この仮定は(41)のように助動詞を伴わない場合に動詞句削除が容認されない事例からも証拠付けられる。

- (41) a. I can't believe Fred won't believe, either.
 b. *I can't believe Fred ~~won't~~ believe, either. (ibid.)

しかし、本論文で扱っているPoss-ing内での動詞句削除はこの仮定の下に收容されない事例と言える。4節でPoss-ingにはTPレベルに付加すると仮定されている *probably* のような文副詞が現れることができないことからその統語構造にTは含まれないと論じた。そのような統語構造においても動詞句削除が容認されるという事実はTと動詞句削除の関連性を弱めることになる。

動詞句削除に関する近年の先行研究として2節で概観したEmoto (2007) も

基本的にこの仮定を踏襲したものと言える。Emoto (2007) 以外の先行研究でも T が何らかの形で動詞句削除に関わるという方針で論を展開しているものが近年多く観察されるが、本論文で扱っている T を含まない統語構造でも動詞句削除が可能な事例が存在することは、T のみを認可子と仮定する動詞句削除の分析は正しくないということを示し、動詞句削除全般に対する分析の今後の方向性を再考する上での一助となると思われる。

5. 結論

本論文では、Poss-ing 内での動詞句削除に関する事例を分析してきた。これまで、動詞句削除に関しては先行研究でさまざまな分析が提案されてきているが、本論文では Lasnik (1999) の、動詞は屈折しない形態で派生に入り、音韻部門で形態的同一性の下で動詞句削除がなされるという動詞形態素の観点からの分析を採用した。さらに、動詞的動名詞の歴史的発達を概観することにより、-ing 接辞は屈折接辞であり、機能範疇としての特性を持つと論じ、Poss-ing では v に基底生成されると主張した。これらの議論に基づいて、Cara (2009) で取り上げられている Poss-ing 内での動詞句削除に関する問題が説明されることを示した。結論的には Poss-ing 内での動詞句削除は先行詞となる動詞句との PF における形態的同一性の下で認可される vP レベルの削除ということになる。また、本論文の議論は、近年さまざまな観点で分析されている動詞句削除に関して、動詞形態素の観点からの分析に支持を与えるということにもなる。

注

¹ これら 2 つの制約は以下の例によってそれぞれ示される。

- (i) a. *I will ~~work on it~~, if I can work on it.
 b. *I will ~~work on it~~, and Mary will work on it too. (Cara (2009: 3))

² DP がフェイズであるという主張に関しては、Svenonius (2004), Chomsky (2007, 2008) を参照。

³ Emoto (2007) はDPの構造は(i)のようになると仮定し、CPとの平行性を捉えることができると主張している。

(i) D-Num-n-N (Emoto (2007: 327))

(ii) C-T -v-V

D-Num-n-N (ibid.)

⁴ Poss-ingの統語構造については4節で議論する。

⁵ Gengel (2005) はMerchant (2001) のE-素性により削除が起こるという分析にしたがって、その素性を持つフェイズ主要部の補部が音韻部門で削除されることで削除現象が観察されると主張している。

⁶ LasnikはTではなくInflと表記しているが、現行の生成文法の枠組みではTを用いることが一般的なので、ここでもTと表記することにする。

⁷ Kim (2005) では助動詞 (be動詞や完了のhave) も屈折しない状態で派生に入る分析が提示されている。また、Nunes and Zocca (2005) でもポルトガル語の動詞句削除の事例から、助動詞も屈折しない状態で派生に入り、Inflとの素性照合の観点で説明されるべきと主張されている。よって、Lasnik (1999) の助動詞が屈折した状態で派生に入る、という主張には議論の余地がある。しかし、助動詞の屈折に関する議論は、本論文で扱うPoss-ing内での動詞句削除の事例には直接関わることではないので、Lasnik (1999) の分析を採用し議論を進めることにする。助動詞と動詞形態素の関係についての詳しい分析は今後の課題としておく。

⁸ このことは定名詞句のみにあてはまることである。(i)に示されるように不定のDPからwh句を抜き出すことは可能である。

(i) Who did you see a picture of t? (Diesing (1992: 97))

したがって、Poss-ingは定名詞句と同様の統語的特性を持つと言える。

⁹ 動詞的動名詞の発達のきっかけとなったのは-ing/-ung接辞と現在分詞を形成する接辞との音韻的融合であると考えられている(Visser(1966), Ukaji(2000)を参照)。古英語期に観察された-ing/-ung接辞は中英語初期になると-ing接辞が優勢になった。一方、現在分詞を作る接辞は古英語期は-endeであり、中英語初期に南部方言でindeになり、そこから語末の-eが脱落して-indとなることがあった。この段階で-ingと-indの間に音韻的な接触が起こり、結果として両者はともに-ingになったと考えられている。現在分詞が名詞を目的語にとるときには前置詞ofを介していなかったことから、それは常に動詞的な性質を持っており、-ing/-ung名詞との音韻的融合の際に現在分詞接辞の持つ動詞的性格が抽象名詞を作る-ing接辞と共有され、動詞的動名詞の発達に至ったということである。(Ukaji (2000) を参照)。

¹⁰ 動詞的動名詞の-ing接辞が機能範疇の主要部を占めるという主張はAbney (1987) でもなされている。さらにこの主張は他の屈折接辞、例えば3人称単数現在の-sや、過去形の-ed接辞などが機能主要部Tを占めると一般に仮定されていることから支持される。

¹¹ (33) のように-ing接辞が v に基底生成されると分析することで-ing接辞が対格を認可する要素になると考えられるかもしれない。この点については、(i)のような繰り上げ動詞を伴うPoss-ingが観察されるという事実が手がかりを与えてくれることになる。

(i) Michael's frequently seeming to be sick... (Moulton (2004: 133))

繰り上げ動詞は一般に対格を付与しないと分析されているので、(i)は v に-ing接辞が基底生成されていても対格付与に関与しないことを示す事例と言える。したがって、ここでは-ing接辞はPoss-ingにおいて v に基底生成されると提案するが、対格付与に関する特性はあくまでも v という機能範疇の特性であると分析する。

¹² 削除のための形態的な同一性が判断される段階では2つ目の vP 内にある V であるbuyのコピーはすでに削除されていると仮定する。

¹³ VP を先行詞に選ぶ話者にとっては動詞句削除の段階で1つ目の VP の主要部にあるplayのコピーは削除されていない。言い換えれば、先行詞 VP の主要部コピーは、動詞句削除より後に削除されることになる。一方、(34)のように常に文法的と判断される事例では、動詞句削除の前に VP の主要部のコピーが削除されていなければならない。なぜこのような派生のプロセスの違いが生じるかについて現段階では明らかにすることはできないが、削除される動詞句の形態が関係している（例えば、削除される動詞句が-ing接辞を伴う場合には、 VP の主要部のコピーが動詞句削除よりも先に削除される）と仮定しておくことにする。この問題の詳細な分析は今後の研究課題としたい。

参考文献

- Abney, Steven Paul. 1987. The English noun phrase in its sentential aspect. Doctoral dissertation, MIT.
- Anderson, Scott. 2007. VP ellipsis in Poss-ing constructions. Ms.
- Cara, Nicholas L. 2009. Verbal ellipsis in nominal domain. Ms.
- Chomsky, Noam. 1957. Syntactic structures. Paris: Mouton.

- Chomsky, Noam. 1993. A minimalist program for linguistic theory. In *The View from Building 20*, ed. Kenneth Hale and Samuel Keyser, 1–52 Cambridge Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2007. Approaching UG from below. In *Interface + recursion = language ? : Chomsky's minimalism and the view from syntax-semantics*, ed. Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1–29, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam. 2008. On phases. In *Foundational issues in linguistic theory*, ed. Robert Freiden, Carlos P. Otero and Luisa Zubizarreta, Maria, 133–166, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Diesing, Molly. 1992. Indefinites. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Emoto, Hiroaki. 2007. The theory of ellipsis in a single-cycle system. *English Linguistics* 24, 319–340.
- Johnson, Kyle. 2001. What VP ellipsis can do, and what it can't but not why. In *The handbook of contemporary syntactic theory*, ed. Mark Baltin and Chris Collins, 439–479, Oxford.: Blackwell.
- Gengel, Kirsten. 2005. Phases and ellipsis. *Linguistic Analysis* 35, 21–42.
- Kim, Sun-Woong. 2005. Affix hopping as PF merger and VP ellipsis. *Studies in Generative Grammar* 15, 8–16.
- Koma, Osamu. 1980. Diachronic syntax of gerund in English and the X-bar theory. *Studies in English Literature* 57, 59–76.
- Lasnik, Howard. 1999. Verbal morphology: syntactic structures meet the minimalist program. In *Minimalist analysis*, 97–119. Malden, Mass.: Blackwell.
- Malouf, Robert. 2000. Verbal gerunds as mixed categories in HPSG. *The Nature and Function of Syntactic Categories* 32, 133–166.
- Merchant, Jason. 2001. *The syntax of silence: slicing, islands and the theory of ellipsis*. Oxford: Oxford University Press.
- Moulton, Keir. 2004. External arguments and gerunds. *Toronto Working Papers in Linguistics* 22, 121–136.
- Nunes, Jairo and Cynthia Zocca. 2005. Morphological identity in ellipsis. *Leiden Papers in Linguistics* 2, 29–42.
- Ohmura, Mitsuhiro. 1995. On the historical development of gerunds: with special reference to their sentential subjects. *Linguistics and Philology* 21, 77–97.
- Omaki, Akira. 2007. Revisiting revived syntactic structures: the extended hybrid approach to verbal morphology. *University of Maryland Working Papers in Linguistics* 16, 89–110.

- Omaki, Akira. 2009. Verbal morphology: return of the affix hopping approach. *NELS* 38, 193–204
- Pires, Acrício. 2001. The syntax of gerunds and infinitives: subject, case and control. Doctoral dissertation, University of Maryland.
- Ross, John Robert. 1967. Constructions on variables in syntax. Doctoral dissertation, MIT.
- Svenonius, Peter. 2004. On the edge. In *Peripheries*, ed. By David Ager, Cécile de Cat and George Tsoulas, 259–287, Dordrecht: Kluwer.
- Swan, Michael. 2005. *Practical English usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Ukaji, Masatomo. 2000. *Eigoshi*. Tokyo: Kaitakusya.
- Yamada, Makoto. 1987. On NP-ing constructions in English. *English Linguistics* 4, 144–164.
- Visser, Frederikus Theodoras. 1966. *A historical syntax of the English language*, vol 2, Leiden: E. J. Brill.

Synopsis

VP Ellipsis in Poss-ing
Satoshi Nakagawa

This paper focuses on VP ellipsis in verbal gerunds with possessive subjects (henceforth, Poss-ing). This type of VP ellipsis is discussed in Anderson (2007) and Cara (2009), but they do not provide a satisfactory account of the phenomenon. In addition, VP ellipsis in Poss-ing has not been paid attention to by previous studies on VP Ellipsis.

Cara (2009) points out that VP ellipsis in Poss-ing has at least two problems to be addressed. The first problem is that VP ellipsis can be only licensed in Poss-ing when the antecedent of elided VP constitutes the VP complement of D with a possessive DP in its Spec position. The second problem is that in some cases, VP ellipsis in Poss-ing is less accepted or completely unaccepted.

There have been many analyses of VP ellipsis made by previous studies. Among them, Emoto (2007) proposes that VP Ellipsis is triggered by the feature which is called “silence feature”. However, this proposal predicts that all examples of VP ellipsis in Poss-ing are grammatical, and therefore cannot account for them properly. Furthermore, Cara (2009) attempts to explain VP ellipsis in Poss-ing in terms of Case morphology of the relevant elements. This analysis, however, faces the same problem as Emoto (2007).

In order to solve the problems with VP ellipsis in Poss-ing, this paper adopts Lasnik (1999), where VP ellipsis is assumed to be related to verbal morphology. Lasnik (1999) argues that lexical verbs enter into the derivation without inflectional affixes, and auxiliary verbs are fully inflected in the lexicon. He further argues that VP ellipsis is possible under morphological identity between elided VPs and their antecedents in PF component. Furthermore, this paper analyses the internal structure of Poss-ing, arguing that the affix *-ing* is a kind of inflectional affix and base-generated on *v* in Poss-ing by observing the historical development of verbal gerunds.

Based on Lasnik's analysis of VP ellipsis and the argument that the affix *-ing* appears in *v*, the problems with VP ellipsis in Poss-ing can be straightforwardly explained. VP ellipsis in Poss-ing cannot be accepted when the elided VP is not morphologically identical to its antecedent VP. Furthermore, by assuming that either *v*P or VP in Poss-ing counts as an antecedent, the shaky acceptability of a particular VP ellipsis case can be accounted for in which the antecedent constitutes the VP constituent of Poss-ing. If the former is chosen, VP ellipsis will not be licensed, while if the latter is chosen, it can be.

Although there have been many kinds of previous analyses of VP ellipsis, the present argument provides support for those of VP ellipsis in terms of verbal morphology.